

小学校における性教育についての教員養成課程学生の意識に関する一考察

天野敦子* 市古雪江** 野谷昌子*** 石走知子¹

*養護教育講座 (看護学)

**長久手町立北小学校

***関西女子短期大学

A Study on the Consciousness of Students of Teacher Training Programs about Sexuality Education in Elementary School

Atsuko AMANO*, Yukie ICHIGO**, Masako NOTANI*** and Tomoko ISHIBASHIRI¹

**Department of School Nursing and Health Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi 448-8542 Japan*

***Kita Elementary School, Nagakute Town, Nagakute, Aichi 480-1131 Japan*

****Kansai Women's College, Kashiwabara, Osaka 582-0026 Japan*

I 序 論

「性」と一言でいってもその構成要素は論者によって様々である。二つの側面から分ければ、ひとつは生物学的特性の違いを意味する「生物学的性別 (Sex)」であり、もうひとつは文化的社会的意味づけをされた性を示す「文化的・社会的性別 (Gender)」になるだろう。学校での性教育はSexだけの教育ではなく、Human Sexuality の教育が必要であるとされている。Sexuality とは耳の間、つまり脳による精神面、男性として女性としての意識、態度、行動すべてを含むものとしている²⁾と解釈される。このように、「性」は多元的に構成されているため、学校において、教師が性教育を行うためには幅広い知識と意欲が要求されることになる。

平成10年度の学習指導要領の小学校・体育では、これまで小学校高学年から開始されていた保健領域の教育が小学校中学年から開始となった。二次性徴や体の発育・発達にかかわる項目が小学校中学年に、心の発達や悩みへの対処が高学年に盛り込まれ³⁾、小学校でもより早期からの「性教育」が重要視されてきていることが窺える。

現代の子どもにおける小学生という時期の特徴として「発育加速化現象・性成熟加速化現象」という言葉に代表されるように、発育・発達の前傾傾向がみられ⁴⁾、性の情報に敏感であり、早い段階から興味や疑問

を持っている⁵⁾といわれている。現代の子どもたちが、小学生の段階から心身にさまざまな変化が現れていることが窺えるが、現在、子どもたちを取り巻く環境は、興味本位の情報が氾濫している状況にある。そのため、正しいことがどれか判らず誤った認識をしてしまい、若年妊娠や人工妊娠中絶、性感染症など性にかかわる問題の増加や、偏見や差別を生むことにもつながっている⁶⁾ともいわれている。このような子どもたちの状況からも、「性教育」を始める時期として小学校低学年から発達段階にあわせた早期教育が望ましいと思われる。

そこで本研究は、将来に小学校の教師になる教員養成大学の学生を対象に、小学校での性教育に対してどのような意識・意欲を持っているかを調査し、大学における科ごとの性教育の学習経験やカリキュラムと照らし合わせ考察した。

II 研究方法

1 データの収集方法

1) 対象及び調査方法

愛知教育大学教員養成課程3年に在学する教育実習終了後の学生380名を対象に、事前に教官の許可を得て、小学校教員免許または養護教諭免許を取得するために必要な講義の時間を利用し、選択式及び自由記述形式を併用した質問紙調査を行った。回収率は100%で、有効回答数は379名(男子119名, 女子257名, 不明3名), 有効回答率99.7%であった。そのうち、小学校教員免許または養護教諭免許を取得する科に所属する

1 愛知教育大学大学院学生 (Graduate Student, Aichi University of Education)

学生336名を今回の研究対象とした。その内訳は表1に示すとおりである。

表1 対象者の内訳 n=336

科	人数
保健体育	49
家政	31
養護教育	39
その他	217

その他の内訳 (再掲)	
国語	33
社会	31
数学	52
理科	32
美術	38
音楽	31

2) 調査期間

1999年11月9日～11月26日

3) 調査項目

- (1) 小学校で行う性教育に対する考え方
- (2) 小学生に行う性教育の場と内容
- (3) 大学での性教育の内容に関する学習経験
- (4) 性教育を指導することへの意識

なお、性教育の内容に関する項目は、「現代性科学・性教育事典」⁶⁾「性教育新・指導要項解説書」⁷⁾、その他先行研究^{8)~11)}を参考に15項目に分類し、表2に示した。

表2 性教育の内容 (15項目)

1. からだのしくみ
2. 二次性徴
3. 初経・月経
4. 精通・射精
5. 性交・受精
6. 胎児の成長と出産
7. 性的な欲求とその調節
8. 男女の心理的变化
9. 男女の相互理解と協力
10. 家庭・社会における男女の役割
11. 家族の役割
12. 性情報への対応の仕方
13. 性被害から身を守る
14. 性感染症 (エイズを除く)
15. エイズ

2 分析方法

対象とした教員養成課程の学生の「小学校で行う性教育に対する考え方」を明らかにし、今まで受けてきた性教育の現状を捉えた。また、小学生に行う性教育について、小学生の時期ではどこの場で、どのような内容で行うのが望ましいと考えるかを把握した。さらに、大学で受けた性教育に関する学習経験を問い、性教育を指導する意識について「保健体育科」「家政科」「養護教育科」「その他の科」の4つの科に分類し、各科の比較分析を行った。調査結果は多変量解析ソフト

HALBAU for windows version5.1を用い、カイ二乗検定で統計的に処理した。

III 結果および考察

1 小学校で行う性教育に対する考え方

小学校での性教育の必要性を質問したところ、表3のような結果となり、どの科においても「必要」と答えた者は9割を超え、有意差は見られなかった。

「必要な理由」については、表4-1のような結果であった。「正しい知識や情報を与える」「情報化社会だから」「心や体の成長が早まっているから」と答えた割合が高いことから、現代の小学生に性教育が必要なものは「必要な時期・必要な時代だから」と捉えていると考えられる。

表3 小学校での性教育の必要性 (人%)

科	必要	不必要
保健体育	n= 49 45(91.8)	4(8.2)
家政	n= 31 29(93.5)	2(6.5)
養護教育	n= 39 38(97.4)	1(2.6)
その他	n=217 199(91.7)	18(8.3)
全体	n=336 311(92.6)	25(7.4)

表4-1 性教育が必要な理由 (複数回答)

	n=311	人 (%)
正しい知識や情報を与える	99	(31.8)
情報化社会だから	45	(14.5)
心身の成長が早まっているから	31	(10.0)
性に関する問題を防止する	31	(10.0)
心身が成長していくから	30	(9.6)
他人や自己理解、悩みの軽減	30	(9.6)
自然なものとして捉えさせる	26	(8.4)
知識や興味を持っているから	16	(5.1)
早くから学ばせる	15	(4.8)
学べる場をきちんと設ける	14	(4.5)
みんなで学べる	13	(4.2)
正しい選択をする力を養う	12	(3.9)

表4-2 性教育が不必要な理由 (複数回答)

	n=30	人 (%)
時期が早い	9	(30.0)
学校でやらなくてよい	6	(20.0)
理解できない	5	(16.7)
逆効果になる	2	(6.7)

東京都幼稚園・小・中・高・身障性教育研究会⁵⁾の児童生徒を対象とした調査では、「異性と手をつなぐことが恥ずかしい」と答えた者が小学校1年生で50%、小学校高学年では80%にも達し、小学校1年生では4人に一人の割合で「性的な嫌がらせを受けたことがある」と答えている。また、同調査の中で小学生の「性」に関する情報源として「教師」が4割と最も高い割合となっており、教師の影響力の大きさを窺うことができ

る。そのため、小学校低学年から起こる羞恥心の芽生えへの配慮や性被害防止の観点からも、教師が正しい知識を持ち、早い段階から性教育を行うことは重要だと思われる。

しかし一方で「不必要な理由」については、表4-2のような結果であり、少数であるが「時期が早い」と答えている割合が一番高かった。内山¹²⁾も具体的な教具を用いることで子どもが興味を示し、真似するという「子どもの模倣性」を無視した性教育の危険性を述

べ、「子どもが興味を持っているからといって早くからすべてを説明するべきではない」としている。「性教育」は場合によっては恐怖感を植え付けたり、自己の性を否定することにもなりかねないため、子どもに合わせた内容を慎重に検討していくことが必要であろう。

次に小学校での性教育の目標について、5つの選択肢から2つ選択してもらったところ、表5のような結果となり、各科間で有意差は見られなかった。

表5 小学校での性教育の目標（2つまで選択） 人(%)

	科 保健体育 n=49	家政 n=31	養護教育 n=39	その他 n=217	合計 n=336
発達の自己像	39(79.6)	26(83.9)	32(82.1)	170(78.3)	267(79.5)
男女関係のルール	13(26.5)	6(19.4)	7(17.9)	38(17.5)	64(19.0)
性の価値観	26(53.1)	18(58.1)	17(43.6)	112(51.6)	173(51.5)
行動的習慣	18(36.7)	11(35.5)	16(41.0)	90(41.5)	135(40.2)
その他	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(0.9)	2(0.6)

「発達の自己像」はどの科においても高い割合で選択され、「性の価値観」「行動的習慣」「男女関係のルール」と続いていた。小学校の時期は心身にさまざまな変化が見れるが、今回の調査では「小学校での性教育の目標」と限定したため、「発達の自己像」が高い割合で選択されたと考えられる。

1973年に安東⁹⁾が現職の小学校教師を対象に同じ質問を行った調査でも、「発達の自己像」を選択した割合が一番高く、今回の結果と同様であった。しかし、一番低かった「性の価値観」については今回の調査で二番目に高い結果となり、2つの調査は異なる結果となった。この理由として、安東の調査では「現職の小学校教師」という立場の異なる者を対象としていることが影響していると考えられる。もう一つの理由として、調査年が大きく異なっていることから、性教育の歴史と照らし合わせて考察してみたい。「性教育(Sex education)」という言葉が使われ始めたのは1970年代(昭和45年頃)からで、性か開放や女性解放を前向きに受け止め始めた³⁾といわれている。しかし、1980年代(昭和50年頃)になると非行の発生が戦後第3のピークになり、特に女子非行が増加した⁷⁾。そして、1985年代(昭和55年頃)になっても性に関する問題は増加・横ばいを続け、性教育のあり方は転機を迎えた。「性の肯定的側面・否定的側面」の両方に目を向けるようになり、「人間の性の両側面を正しく捉え、人類の福祉に結びつく性教育(Sexuality education)」に変わり始めた¹³⁾のである。安東の調査は、性教育の黎明期である1970年代に行われたため「男女の相互理解と交際のマナー」にあたる「男女関係のルール」や「性犯罪の予防、性に関するマナーの習得」にあたる「行動的習慣」が高い割合で選択されたと思われる。一方、今回の調査の回答者の多くは1984年に小学校へ入学し、性教育の過渡期であった1980年代の新しい性教育(Sexuality

education)を受けているため「性の価値観」が高い割合で選択されたと思われる。このように歴史的背景と照らし合わせてみると、「性教育」の目標は時代とともに変化し、個人の意識に影響を与えており、今後も流動的に変化していくものと思われる。

2 小学生に行う性教育の場と内容

小学生に行う性教育の各項目についてどこの場で行うのがよいかを質問したところ、表6のような結果となった。どの項目においても「小学校と家庭」「小学校」を合わせた割合が高く、性教育を行う場として学校が重要だと感じていることがわかる。

小学校で教えなくても良いと考えているのは「7. 性的欲求とその調節」「14. 性感染症」であった。また、「9. 男女の相互理解と協力」の項目においては、「小学校では教えなくてもよい」とした割合が養護教育科では高く、家政科では低く、科による差が見られた。「小学校では教えなくてもよい」とした考えの中には「早すぎる」もしくは「教えなくてもよい」という2種類が考えられる。例えば、性感染症の一つである「15. エイズ」は小学生で指導する必要があると考えているにもかかわらず、「14. 性感染症」を「まだ早い」と考えている割合が高い。これらの理由として、エイズに関しては、興味本位の情報から社会に急速に広がってしまった誤った認識や差別意識の改善を早期に図らなければならない、という社会背景のあることが考えられる。しかし、性感染症は「性行為によって感染する」ということや「小学生にとっては身近ではない」ということもあり、「まだ早い」の割合が高かったと考えられ、小学生の発達段階を考慮した結果と思われる。また、指導内容については、「エイズ」から人権問題を考えるといった内容もあれば、性感染症予防について考えるといった教育目的の異なる内容もある。小学校に

表6 小学生の段階で性教育をおこなう場

人(%)

性教育の内容	科	保健体育 n=44	家政 n=29	養護教育 n=35	その他 n=192
1. からだのしくみ	小学校と家庭	32(72.7)	21(72.4)	24(68.6)	112(58.3)
	小学校	9(20.5)	6(20.7)	10(28.6)	64(33.3)
	家庭	1(2.3)	1(3.4)	1(2.9)	4(2.1)
	まだ早い	2(4.5)	1(3.4)	0(0.0)	12(6.3)
2. 二次性徴	小学校と家庭	28(63.6)	13(44.8)	24(68.6)	106(55.2)
	小学校	10(22.7)	11(37.9)	10(28.6)	66(34.4)
	家庭	0(0.0)	0(0.0)	1(2.9)	4(2.1)
	まだ早い	6(13.6)	5(17.2)	0(0.0)	16(8.3)
3. 初経・月経	小学校と家庭	35(79.5)	26(89.7)	28(80.0)	139(72.4)
	小学校	5(11.4)	2(6.9)	6(17.1)	34(17.7)
	家庭	1(2.3)	1(3.4)	1(2.9)	11(5.7)
	まだ早い	3(6.8)	0(0.0)	0(0.0)	8(4.2)
4. 精通・射精	小学校と家庭	28(63.6)	19(65.5)	25(71.4)	112(58.3)
	小学校	8(18.2)	6(20.7)	7(20.0)	52(27.1)
	家庭	1(2.3)	0(0.0)	1(2.9)	10(5.2)
	まだ早い	7(15.9)	4(13.8)	2(5.7)	18(9.4)
5. 性交・受精	小学校と家庭	16(36.4)	13(44.8)	18(51.4)	76(39.6)
	小学校	13(29.5)	9(31.0)	10(28.6)	58(30.2)
	家庭	2(4.5)	1(3.4)	2(5.7)	8(4.2)
	まだ早い	13(29.5)	6(20.7)	5(14.3)	50(26.0)
6. 胎児の成長と出産	小学校と家庭	27(61.4)	16(55.2)	18(51.4)	94(49.0)
	小学校	6(13.6)	8(27.6)	11(31.4)	52(27.1)
	家庭	1(2.3)	0(0.0)	1(2.9)	8(4.2)
	まだ早い	10(22.7)	5(17.2)	5(14.3)	38(19.8)
7. 性的な欲求とその調節	小学校と家庭	12(27.3)	8(27.6)	8(22.9)	52(27.1)
	小学校	8(18.2)	8(27.6)	7(20.0)	42(21.9)
	家庭	1(2.3)	1(3.4)	1(2.9)	6(3.1)
	まだ早い	23(52.3)	12(41.4)	19(54.3)	92(47.9)
8. 男女の心理的变化	小学校と家庭	19(43.2)	9(31.0)	13(37.1)	76(39.6)
	小学校	9(20.5)	11(37.9)	9(25.7)	57(29.7)
	家庭	0(0.0)	1(3.4)	2(5.7)	6(3.1)
	まだ早い	16(36.4)	8(27.6)	12(34.3)	53(27.6)
9. 男女の相互理解と協力	小学校と家庭	19(43.2)	16(55.2)	11(31.4)	98(51.0)
	小学校	8(18.2)	6(20.7)	8(22.9)	38(19.8)
	家庭	2(4.5)	2(6.9)	4(11.4)	8(4.2)
	まだ早い	15(34.1)	5(17.2)	12(34.3)	48(25.0)
10. 家庭・社会における男女の役割	小学校と家庭	23(52.3)	18(62.1)	14(40.0)	103(53.6)
	小学校	7(15.9)	5(17.2)	3(8.6)	27(14.1)
	家庭	2(4.5)	3(10.3)	4(11.4)	27(14.1)
	まだ早い	12(27.3)	3(10.3)	14(40.0)	48(25.0)
11. 家族の役割	小学校と家庭	31(70.5)	22(75.9)	20(57.1)	114(59.4)
	小学校	2(4.5)	4(13.8)	4(11.4)	22(11.5)
	家庭	5(11.4)	2(6.9)	8(22.9)	26(13.5)
	まだ早い	6(13.6)	1(3.4)	3(8.6)	30(15.6)
12. 性情報への対応の仕方	小学校と家庭	17(38.6)	16(55.2)	15(42.9)	84(43.8)
	小学校	9(20.5)	8(27.6)	6(17.1)	36(18.8)
	家庭	0(0.0)	2(6.9)	3(8.6)	16(8.3)
	まだ早い	18(40.9)	3(10.3)	11(31.4)	56(29.2)
13. 性被害から身を守ること	小学校と家庭	19(43.2)	20(69.0)	18(51.4)	98(51.0)
	小学校	5(11.4)	3(10.3)	7(20.0)	27(14.1)
	家庭	1(2.3)	1(3.4)	3(8.6)	8(4.2)
	まだ早い	19(43.2)	5(17.2)	7(20.0)	59(30.7)
14. 性感染症(エイズを除く)	小学校と家庭	16(36.4)	14(48.3)	9(25.7)	72(37.5)
	小学校	4(9.1)	7(24.1)	9(25.7)	39(20.3)
	家庭	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(1.6)
	まだ早い	23(52.3)	8(27.6)	17(48.6)	78(40.6)
15. エイズ	小学校と家庭	25(56.8)	18(62.1)	16(45.7)	95(49.5)
	小学校	8(18.2)	6(20.7)	12(34.3)	48(25.0)
	家庭	2(4.5)	0(0.0)	1(2.9)	6(3.1)
	まだ早い	9(20.5)	5(17.2)	6(17.1)	43(22.4)

おいてどの内容を取り扱うかについては、十分に検討することが必要であると思われる。

さらに、「12. 性情報への対応の仕方」「13. 性被害から身を守ること」では科によって結果にばらつきが見られた。保健体育科では「小学校では教えなくてもよい」と答えた者は40%を超えていたが、前述の小学生に性教育が必要な理由として「情報化社会だから」「性被害の防止」と答えた者が多かったことを考えると、矛盾する結果となった。

小学校では各教科や道徳、特別活動を中心として性教育を行うことが多く14)、さまざまな科の出身者が性教育を担当すると思われる。性教育を行う場として学校を適切と考えるのであれば、性教育を指導する者として「なぜ小学校で指導する必要があるのか」、「どのような内容が適切か」など小学校で行う性教育の吟味を充分に行うことが重要になってくると思われる。

3 大学での性教育の内容に関する学習経験

性教育の内容に関する15項目について、大学での学習経験を質問したところ、表7のような結果となり、すべての項目において各科間で有意差が見られた。学習経験の割合が高かったのは、養護教育科であり、「1. からだのしくみ」「2. 二次性徴」「3. 初経・月経」「4. 精通・射精」「5. 性交・受精」「6. 胎児成長と出産」「7. 性的な欲求とその調節」「8. 男女の心理的变化」「13. 性被害から身を守ること」「14. 性感染症」「15. エイズ」の11項目において最も高い結果であった。残りの4項目「9. 男女の相互理解と協力」「10. 家庭・社会における男女の役割」「11. 家族の役割」「12. 性情報への対応の仕方」については家政科で最も高かった。保健体育科とその他の科については、ほとんどの項目で養護教育科や家政科より低い結果であった。

次に、大学での性教育の学習経験に関連があると思われる講義内容を、愛知教育大学のシラバス^{15)~20)}から取り上げてみると以下のものであった。

教育科目の「教育心理学」では胎児期から乳児期・幼児期への発達に関すること、教科教育科目の「体育科教育」では保健領域に関すること、「家庭科教育」では「文化的・社会的性 (Gender)」に関することが取り上げられていた。また、専攻科目では、養護教育科は「解剖学」で生殖器系の構造、「生理学」で生殖機能などの「生物学的性 (Sex)」に関すること、「微生物学」でエイズなどの感染症、「学校保健活動」で保健教育と性教育・エイズ教育・環境教育との関わり、さらに「看護学 (母子看護)」ではライフサイクルの一環としての母子看護、妊娠・出産・育児など様々な講義で幅広く取り上げられている。家政科は「家庭経営学・家族論」で家庭のあり方など主として「文化的・社会的性 (Gender)」に関することが取り上げられていた。保健体育科は「衛生学および公衆衛生学」でエイズ学習、「学校保健」でエイズ学習や性教育、その他の科は、社会科が「社会学概論」で家族の諸問題について、理科が「生物学」で親子関係・雌雄関係、「動物生理学」で胎児と母胎、「発生学」で受精のしくみ・体外受精の問題点などが専門領域で取り上げられていた。

これらの結果から、大学における性教育の学習経験には各科によって大きく差があり、またその学習内容には各科でそれぞれ特色があることがわかった。今後、大学での学習経験をふまえ、小学校教師の間でも出身科の異なる教師がT・Tのような形で協同して性教育を展開していくことが望ましいのではないかと思われる。

4 性教育を指導することへの意識

性教育の内容に関する15項目に関して指導意識を質

表7 大学で習った割合

性教育の内容	科	人(%)			
		保健体育 n=49	家政 n=31	養護教育 n=39	その他 n=217
1. からだのしくみ	**	6(12.2)	8(25.8)	20(51.3)	5(2.3)
2. 二次性徴	**	6(12.2)	3(9.7)	11(28.2)	6(2.8)
3. 初経・月経	**	3(6.1)	4(12.9)	14(35.9)	4(1.8)
4. 精通・射精	**	5(10.2)	3(9.7)	13(33.3)	3(1.4)
5. 性交・受精	**	6(12.2)	7(22.6)	16(41.0)	6(2.8)
6. 胎児の成長と出産	**	3(6.1)	11(35.5)	22(56.4)	22(10.1)
7. 性的な欲求とその調節	**	5(10.2)	1(3.2)	11(28.2)	7(3.2)
8. 男女の心理的变化	**	3(6.1)	3(9.7)	11(28.2)	17(7.8)
9. 男女の相互理解と協力	**	4(8.2)	11(35.5)	13(33.3)	18(8.3)
10. 家庭・社会における男女の役割	**	18(36.7)	20(64.5)	14(35.9)	33(15.2)
11. 家族の役割	**	12(24.5)	18(58.1)	13(33.3)	34(15.7)
12. 性情報への対応の仕方	**	4(8.2)	9(29.0)	10(25.6)	13(6.0)
13. 性被害から身を守ること	**	6(12.2)	6(19.4)	14(35.9)	16(7.4)
14. 性感染症 (エイズを除く)	**	10(20.4)	10(32.3)	29(74.4)	8(3.7)
15. エイズ	**	16(32.7)	13(41.9)	24(61.5)	21(9.7)

** P < 0.01

問し、「ぜひ指導したい」「指導してもよい」と答えたものを「指導意識の高い群」、「あまり指導したくない」「指導したくない」と答えたものを「指導意識の低い群」として集計したところ、表8のような結果となった。有意差が見られたのは、「2. 二次性徴」「3. 初経・月経」「4. 精通・射精」の3項目であり、「指導意識の高い群」として養護教育科が最も多く、次いで保健体育科に多くみられた。「4. 精通・射精」では、家政科とその他の科に「指導意識の低い群」が2割以上みられた。また、「7. 性的欲求とその調節」「12. 性情報への対応の仕方」については保健体育科で「指導意識の高い群」が最も多かったが、家政科や養護教育科に比べ男子の割合が高いことが影響していると考えられた。「9. 男女の相互理解と協力」「10. 家庭・社会における男女の役割」「11. 家族の役割」については家政科で、そのほかの10項目については養護教育科で「指導意識の高い群」が最も多かった。家政科にお

いて「9. 男女の相互理解と協力」「10. 家庭・社会における男女の役割」「11. 家族の役割」に、養護教育科でそのほか10項目に「指導意識の高い群」が多かったのは、それぞれの科の専門領域に近く、大学で習った割合が高かったことが影響していると思われる。

これらの結果から専門領域や大学での学習経験が指導意識の高低に影響していると思われる。後藤らの小学校教師を対象とした調査でも、大学での卒前教育を望む人は7割以上にみられた⁹⁾。今後、性教育を行う者の「性教育」への意識を高めるために、大学におけるカリキュラムの配分や内容を検討する必要があると思われる。

IV 結 語

現在、子どもたちを取り巻く環境の中で、性に関する興味本位の情報が氾濫し、小学校でもより早期の性教育が求められている。性教育は性の概念の多様性が

表8 性教育を指導する意識 人(%)

性教育の内容	科	保健体育 n=49	家政 n=29	養護教育 n=39	その他 n=208
1. からだのしくみ	高い群	45(91.8)	26(89.7)	36(92.3)	180(86.5)
	低い群	4(8.2)	3(10.3)	3(7.7)	28(13.5)
2. 二次性徴	* 高い群	46(93.9)	25(86.2)	39(100.0)	179(86.1)
	低い群	3(6.1)	4(13.8)	0(0.0)	29(13.9)
3. 初経・月経	* 高い群	46(93.9)	26(89.7)	39(100.0)	178(85.6)
	低い群	3(6.1)	3(10.3)	0(0.0)	30(14.4)
4. 精通・射精	** 高い群	43(87.8)	23(79.3)	37(94.9)	150(72.1)
	低い群	6(12.2)	6(20.7)	2(5.1)	58(27.9)
5. 性交・受精	高い群	43(87.8)	21(72.4)	35(89.7)	163(78.4)
	低い群	6(12.2)	8(27.6)	4(10.3)	45(21.6)
6. 胎児の成長と出産	高い群	46(93.9)	28(96.6)	37(94.9)	182(87.5)
	低い群	3(6.1)	1(3.4)	2(5.1)	26(12.5)
7. 性的な欲求とその調節	高い群	41(83.7)	18(62.1)	26(66.7)	135(64.9)
	低い群	8(16.3)	11(37.9)	13(33.3)	73(35.1)
8. 男女の心理的变化	高い群	44(89.8)	25(86.2)	36(92.3)	180(86.5)
	低い群	5(10.2)	4(13.8)	3(7.7)	28(13.5)
9. 男女の相互理解と協力	高い群	43(87.8)	29(100.0)	38(97.4)	183(88.0)
	低い群	6(12.2)	0(0.0)	1(2.6)	25(12.0)
10. 家庭・社会における男女の役割	高い群	44(89.8)	28(96.6)	30(76.9)	183(88.0)
	低い群	5(10.2)	1(3.4)	9(23.1)	25(12.0)
11. 家族の役割	高い群	45(91.8)	28(96.6)	27(69.2)	187(89.9)
	低い群	5(10.2)	1(3.4)	12(30.8)	21(10.1)
12. 性情報への対応の仕方	高い群	44(89.8)	25(86.2)	32(82.1)	166(79.8)
	低い群	5(10.2)	4(13.8)	7(17.9)	42(20.2)
13. 性被害から身を守ること	高い群	41(83.7)	24(82.8)	37(94.9)	181(87.0)
	低い群	8(16.3)	5(17.2)	2(5.1)	27(13.0)
14. 性感染症(エイズを除く)	高い群	46(93.9)	23(79.3)	37(94.9)	176(84.6)
	低い群	3(6.1)	6(20.7)	2(5.1)	32(15.4)
15. エイズ	高い群	45(91.8)	26(89.7)	37(94.9)	189(90.9)
	低い群	4(8.2)	3(10.3)	2(5.1)	19(9.1)

* P < 0.05 ** P < 0.01

ら、幅広く専門的知識を必要とするものであり、今後、小学校教師の「性教育」の力量に期待されるころは大きい。

今回、将来に小学校の教師を目指す教員養成大学の学生を対象に、「小学校での性教育」に関する意識を調査した。その結果、対象者は9割以上が小学校での性教育の必要性を感じており、その理由として必要な時期・時代であるからと捉えていた。また彼らは1980年代の性教育に影響を受けていたが、小学生に行う性教育の場として家庭と学校を望んでいるものが多かった。さらに、彼らが受けた大学での性教育に関する学習経験や学習内容には各科でそれぞれ特色があり、その学習経験は指導意識の高低に影響していることがわかった。

これらのことから、子どもたちの実態や時代とともに変化していく性教育の概念に合わせた性教育を行っていく必要が小学校にはあり、学生は大学における性教育の学習経験をふまえ、小学校において、出身科の異なる者が協同して性教育を展開していくことを念頭に学習していくことが望ましいと思われた。そして、性教育を行う者の「性教育」への意識を高めるためには、養成段階である大学における性教育のカリキュラムの配分や内容を検討する必要性もあることが示唆された。

引用文献・参考文献

- 1) 河野喜代美：「セクシュアリティをめぐって」, 新水社, 1998
- 2) 武田敏：「今、性・エイズ教育はどのように考えたらよいか
1 性と性教育のコンセプト」, 「性教育・エイズ教育の理論から展開へ性教育はこれでよいか」, ぎょうせい, 1994
- 3) 文部省：「小学校学習指導要領平成10年度」, 大蔵省印刷局, 1998
- 4) 福原保子：「小学生の性に関する認識」, 保健の科学30(2), 70~73, 1988
- 5) 東京都幼稚園・小・中・高・身障性教育研究会：「1996年調査児童・生徒の性最新版」, 学校図書, 31~32, 1996
- 6) 「現代性科学・性教育事典」編集委員会：「現代性科学・性教育事典」小学館, 1995
- 7) 財団法人日本性教育協会：「性教育新・指導要項解説書」, 小学館, 1990
- 8) 後藤ひとみ他：「小学校教師の性教育に関する意識」, 北海道教育大学紀要44(1), 293~305, 1993
- 9) 安東利夫他：「性教育についての教師の意識—校種間の比較—」, 大分大学紀要4(5), 77~89, 1975
- 10) 板谷幸恵：「小・中学校における性教育指導内容についての教師・母親の認識に関する調査研究(2)—指導場所に見た指導内容について—」, 女子栄養大学紀要10, 151~159, 1979
- 11) 藤田禄太郎他：「小・中学校における性教育指導計画についての教師の意識に関する調査研究—養護教諭と学級担任の比較—」, 女子栄養大学紀要8, 89~95, 1977
- 12) 内山源：「学校性教育の現状・条件と性教育」, 「性教育はこれでよいか」, ぎょうせい, 1994
- 13) 黒川義和：「これからの性教育(上)追捕版」, 東山書房, 1993
- 14) 文部省：「学校における性教育の考え方, 進め方」, ぎょうせい, 1999
- 15) 愛知教育大学教員養成課程(専門)編：「授業計画1997」, 1997
- 16) 愛知教育大学教員養成課程(専門)編：「授業計画1998」, 1998
- 17) 愛知教育大学教員養成課程(専門)編：「授業計画1999」, 1999
- 18) 愛知教育大学教員養成課程(教科科目・教職科目)編：「授業計画1997」, 1997
- 19) 愛知教育大学教員養成課程(教科科目・教職科目)編：「授業計画1998」, 1998
- 20) 愛知教育大学教員養成課程(教科科目・教職科目)編：「授業計画1999」, 1999

(平成12年9月11日受理)